

天龍山石窟の研究 — 研究史と問題点 —

神谷麻理子

A Study on Tian Long Shan Grottoes

— History of studies and its problem — KAMIYA Mariko

Tian Long Shan Grottoes are located among the hills 25 miles southwest Tai Yuan of Shanxi Province. There are twenty-one major grottoes and more than 500 statues scattered on precipices. Grotto construction started in the Eastern Wei Period and continued during the period of Sui and Tang Dynasties.

In 1918, Japanese historian of architecture T. Sekino discovered this grotto and made its photographic records. However, in the 1920s Tian Long Shan Grottoes were badly looted. Some of the best treasures were later collected by museums and art connoisseurs throughout the world. Therefore study of the Tian Long Shan Grottoes is very difficult. In this report I trace a history of Tian Long Shan Grottoes studies and discuss some of the problems that are inherent to this work.

中国山西省太原市から西南約四十キロメートルのところに位置する天龍山石窟は、東魏から唐にかけて開鑿された仏教石窟寺院である。二十世紀の初め、わが国の関野貞博士の調査によって、その優秀な仏教彫刻群が初めて世に知られることとなった。その後、多くの研究者や美術家が当地に足を運び、調査報告や論文、また写真集などを発表したが、同時に仏像の盗難が相次ぎ、天龍山石窟は多大な被害を蒙った。さらに、砂岩という軟弱な石質のため、窟内の彫像は深刻な風化に侵されている。

天龍山石窟の造営に関する文献史料は非常に乏しく、その研究はどうしても様式に頼らざるを得ないが、破壊を蒙った現在の石窟ではそれも困難を極める。従って、破壊以前の写真は貴重な資料となる。近年では世界中に散逸した仏像を集め、石窟の復元的な考察も積極的におこなわれるようになっていく。

本稿では、天龍山石窟研究の第一段階として、諸先学の研究業績を整理し、その意義を明らかにするとともに、天龍山石窟研究における問題点について考えてみたいと思う。

一 天龍山石窟造営の概要

天龍山石窟は、天龍山の山腹を東西峰にわけて、総数二十四の窟を穿つ。東峰は第一から第八まで、西峰は第九から第二十一までの窟番号がついており、その他いくつかの小さな龕が岩壁に彫られている。岩質は白色にちかい細密な砂岩で、優美で写実的な表現をより効果的に見せてくれる。

石窟の造営については『嘉靖太原縣志』巻一の「寺觀」条に、^(注1)

天龍寺、在縣西南三十里、王索西都北齊 皇建元年、建内有石室二十四龕石佛四尊、及隋開皇間碑刻石室銘。寺東一里餘、鑿壁爲池、有天龍廟（下略）

とあり、皇建元年（五六〇）天龍山石窟が天龍寺と称する石窟寺院として開鑿されたことがわかる。

さらに『太原志・太原府』の「寺觀」条は、^(注2)

天龍寺、在本縣西南三十里、北齊置、有皇建中并州定國寺僧造石窟。

と、并州定國寺の僧が天龍山石窟の造営をおこなったことを記している。并州とは晋陽（現在の太原市晋源鎮）のことである。

永熙元年（五三二）、北魏の実力者、高観は爾朱氏を滅ぼし、晋陽に大丞相府を置いた。その二年後の永熙三年、孝静帝を擁立、鄴（現在の河北省臨漳県）に遷都し、東魏が始まる。高観は晋陽

で軍事の統制にあたり、この頃天龍山に避暑宮を造営した。武定五年（五四七）高観が没すると、高観の次子、高洋が孝静帝を廃し、武帝八年、自ら文宣帝として北斉を建国する。文宣帝もまた、父高観と同様、天龍山に避暑宮を造営した。前掲『太原志・太原府』「寺觀」条に、

仙巖寺、在縣西南三十里、北齊避暑之宮。唐武徳七年（六二四）賜額。今廢。

とあり、さらに同書「宮室」条では

避暑宮、在本縣西南三十里天龍寺東址、有重岡數畝。昔北齊高帝及東魏文宣帝避暑離宮。

と記す。仙巖寺、すなわち文宣帝の避暑宮が天龍寺の東にあり、両寺院はかなり近い距離に建てられていたことがわかる。

一方、前掲『嘉靖太原縣志』巻一「寺觀」条には、

仙巖寺、在縣西南三十里葦谷山。北齊天保二年建爲避暑宮賜名。

と、北斉の天保二年（五五一）に避暑宮が建てられ、仙巖寺は葦谷山にあったとしている。葦谷山が具体的にどこにあたるか問題はあがあるが、これらの史料からいえるのは、東魏から北斉にかけて

東魏 永熙三年—武定五年 高観造営の避暑宮

北齊 天保二年 文宣帝造営の避暑宮(仙巖寺)

北齊 皇建年間 定国寺僧造営の天龍寺(石窟)

の三つが天龍山に造営されていたということである。

なお、山腹の石窟から下ること数十分、麓に聖壽寺という寺院があり、一般的には天龍寺の後身と考えられている。^(注3)

現在、番号のついた天龍山石窟の二十一窟中、東魏の様式をもつものが第二・第三窟(双窟)、また北齊の様式をもつものが第一窟(隋説あり)、第十窟、第十六窟とするのが最も有力であり、これらの建物と天龍山石窟の造営が具体的にどのように関わるか、今後さらに吟味が必要である。^(注4)

続く石窟造営に関する史料は、天龍山石窟中最も重要とされる第八窟門外東壁の碑である。隋の開皇四年(五八四)という、石窟中唯一の紀年銘を有することで、第八窟は基準窟となっている。

北周の武帝がおこなった酷烈な廃仏(五七四—七九)は、北齊にも大きく影響し、仏教は一時衰退する。しかし、北周が復仏、開皇元年(五八一)に隋が統一すると再び仏教は盛んになり、晋陽にも多くの寺院が建立された。第八窟は東峰群の最西端に位置し、規模も大きいため、天龍山石窟の他の窟では例をみない、いわゆる塔廟窟で、通常の三壁に加え、中心方柱の四面にも仏龕を穿った豪華な造りである。仏教復興後、間もなく着手された窟として相応しい。

唐代に入り、天龍山石窟では次々と窟が開鑿された。唐代の石窟造営に関わる史料として注目すべきは、郭謙光「大唐勿部將軍功徳記」^(注5)である。もともとは碑像であったがそれも失われ、現在は拓本でその部分のみを残す。後に収録された史料の注記には

「天龍寺の後に在り」とあるが、詳しい位置は明らかでない。神龍二年(七〇六)から景龍元年(七〇七)、右金吾衛將軍勿部珣が、

天龍山に三世仏像及び諸眷属を造立したことが記されており、紀年銘を有することから、唐代石窟造営の重要な手がかりになるといえる。なお本「功徳記」が初めて注目されたのは戦後のこと^(注6)で、Margit Rie の論考が最も早い。天龍山石窟中の半分以上が唐代の窟であり、この時期最も造営が盛んであったことを物語っている。

続く五代の北漢(九五—七九)、天龍山の弥勒閣に石像を設けたことが「大漢英武皇帝新建天龍寺千佛樓之碑」^(注7)に記されている。弥勒閣とは恐らく第九窟にあたると思われるが、石窟全体にわたって、どの程度積極的な造営がされたのかはわからない。以後、山麓の聖壽寺も含めて、断続的な重修はおこなわれるが、次第に顧みられることも無くなっていた。

二 一九一八年—天龍山石窟の発見

大正七年(一九一八)、建築史家の関野貞によって、天龍山石窟は再び脚光を浴びる。^(注8)当時、関野貞は中国建築踏査のため、中国各地を巡歴していた。同年六月、太原に到着し、文献にある近隣の仏教史蹟を訪ね回っていた時、天龍山石窟を偶然発見した。そ

の最初の報告書が『建築雜誌』三八四号で紹介された「西遊雜信上」である。後に「天龍山石窟」を『國華』三七五号（一九二一年）に発表、発見に至るまでの経緯を次のように記している。

余は去大正七年六月二十八日太原縣に遊び、三日間滞在、其附近の遺蹟を探檢せしが、其際府縣志に載せられたる石窟石佛等に就き、知縣及び多くの土民に問ひ質せしも知る者全く無かりき、翌二十九日は晋祠、華塔寺、風洞、淨明寺等を訪れ、晋祠の道士等に問ふに童子寺の事を以てせしも明かならず、唯天龍山の所在を詳かにすることを得たり。

翌六月三十日、関野貞は、天龍山に至り、まず麓の聖壽寺、さらに石窟まで登った。当時、現在のような石段の山道はなく、「千辛萬苦纔に石窟のある處に至る」と語っている。

二日間の調査で、関野貞は十四の窟を発見する。しかし、東西を逆に解したようで、東峰と西峰を誤って記している。また、東峰の最東端に位置する第一窟は、発見することができず、現在の第二窟を「第一窟」とした。とはいえ、比較的正確な窟平面図を掲載し、各窟ごとの特徴を詳細に述べているため、後進の天龍山石窟の理解に大きな混乱は招かなかつた。

建築史家であつた関野貞は、彫刻よりも寧ろ、建築様式に着目した。天龍山石窟の北斉と隋の窟には、門口に木造建築を模した斗肘木や墓股が造られており、これらの手法はわが国の飛鳥時代の建築様式と類似していることを指摘している。

なお、関野貞があげた天龍山石窟の重要性をまとめると、凡そ次のとおりになる。

一、北斉の重要な石窟が割合完全に保存されている。
二、正確な隋初の石窟が残されており、北魏、北斉、隋初唐の芸術推移を看取できる。

三、北斉、隋初の窟の前面にある木造建築を模した向拝は、当時の木造建築様式の一斑を知ることができる。

四、他の石窟には見られない、唐初の優秀な彫刻を残す。

関野貞は第十八窟以西の窟には全くふれていない。おそらく発見できなかったであろう。仮に発見されていたとしたならば、天龍山石窟における唐代彫刻を、さらに高く評価したのではないだろうか。なお、調査の際、写真乾板不足のため充分な撮影がおこなえなかつたことを「深く遺憾とするなり」と嘆いておられるが、『國華』に掲載した第十四窟西壁の菩薩像（現在東京国立博物館所蔵）は、その彫刻的水準の高さを正確に伝えたといえよう。

関野貞の踏査の二年後、洋画家の木村莊八が天龍山石窟を訪れており、大正十年（一九二一）の『中央美術』七巻二号に「天龍山石窟を見る」を発表した。これは旅行記であるが、作家の目から見た当時の天龍山石窟の様子を知る上で興味深い。

木村莊八とはほぼ同じ頃、常盤大定が天龍山石窟の最初の調査をおこない『支那佛蹟踏査 古賢の跡へ』（金尾文淵堂、一九二一年）を発表した。関野貞と同様、石窟の方位に誤解があり、東西峰を北南峰としている。また、やはり東峰の第二窟から西峰の第十四窟までの踏査で留まり、報告は各窟の簡単な概要を記した程度で

終っている。だが、その後常盤大定は二度にわたって天龍山石窟の調査をおこない、昭和元年（一九二六）、関野貞とともに『支那佛教史蹟』第三集（佛教史蹟研究会編）に、後の田中俊逸の調査成果も加えた、詳細な報告書を発表した。

発見当時の天龍山石窟の調査はまさに困難を極めるものであった。常盤大定は最初の石窟踏査の様子を「全體この石窟山には登る道がない。急峻なる断崖で、踏むに随つて崩壊せる砂岩が崩れ去るので、道がつけられないのである。一たび足を失すれば、生命の問題ではないが、手や顔を怪我せずに終らぬ」と語っている。天龍山石窟研究の第一歩は、文献地誌を手がかりに、手探り状態の厳しい条件下で始まった。

三 一九二〇年代 — 石窟調査と破壊

大正十一年（一九二二）三月、田中俊逸が外村太治郎と平田鏡（写真技師）とともに天龍山石窟の調査をおこない、同年「天龍山石窟調査報告」を『佛教学雑誌』第三卷第四号に発表した。

田中俊逸の調査の最も大きな収穫は、関野貞が見落とした東峰最東端の第一窟と、西峰第十八窟以西の諸窟の発見であった。まず第一窟の発見状況については次のように記している。

（上略）関野博士が第一窟と命名された窟の東方直經約十五六間の處に崖前に雜木が茂つた中に、洞窟らしいものが見える。あるあると勇んで粘板岩の踏むに従つて、崩壊するのを攀登して、崖に近づくと、進むに足の踏場がなくなつて、稍

やためらつてゐるうちに。崩壊した岩石と共に二十尺餘の下に墜落した。（中略）夫れから道を換へて窟に達すると、半埋れた窟があつた。前面の繁つた雜木を伐つて撮影した。

一方、第十八窟以西の発見経緯については、

第十六窟から西へ進むと、寺僕は此西には窟は無いと云ふ。吾々は窟は無くとも良いと尚も進むと、「豹や狼は彼方の方面から來るのであるから、黄昏までには山を下りよ」と脅かされ、崖を降り谿を攀つて直徑約七八十間の處に、崖上二十尺位の處に、巾一尺余、高さ二尺位の躋穴のやうに掘られたものが、一間宛位の間隔に横列して五個もある。此邊に或は建造物でもあつたのかと又進むと、柏樹の蔭に崖壁約二十尺の上方に一窟（第十八窟）を発見した。（中略）夫れから、崖面の北に曲つて又一小窟を発見し、續いて第二十、二十一の大一小窟を探し當て、豹や狼の來ぬ間に山を降ることゝした。

と述べており、窟だけではなく建造物の痕跡についてもふれてい

る。第一窟が北斉、乃至は隋様式をみせるのに対し、第十八窟以西の窟はすべて唐代造営のものであつた。しかも、第十八窟、第二十一窟などは、第十四窟と匹敵する優秀な彫刻を具えており、これらの諸窟発見なしでは「天龍山様式」の呼称は生れなかつたといえる。

中商会)である。

山中定次郎は「自序」において、盗掘による天龍山石窟の破壊を悲嘆し「爾來感銘して首を失つた佛達の爲めに、その首を求めて歩いたのであつたが私の斯うした心が通じたといふのか、ある佛の首を東で求め、ある佛の首を西で發見し、随分かけ離れた土地で、忘れんとして忘れ得ぬ、その馴染み深い石佛の首を發見したのであつた」と述べている。『天龍山石佛集』には三十四点の佛頭(菩薩頭を含む)が掲載されているが、明らかに天龍山石窟の像ではないものも含まれている。昭和七年には東京上野で「世界古美術展覧会」が開かれ、天龍山石窟将来像も数多く陳列された。^(注1)山中商会が収集したこれらの諸像は、後に世界中の美術館・博物館や個人収集家の手に渡る。

山中定次郎と天龍山石窟盗掘との具体的な関連はわからない。表面的には、剥奪された天龍山石窟の諸像を山中定次郎が買い集めたことになっているが、疑念を抱かないわけでもない。いずれにせよ山中商会の動きが、盗掘人を煽動したことは否めない。現に中国側は、天龍山石窟の破壊が山中定次郎の強奪によるものとして批判的にみている。^(注2)

四 一九三〇年代から終戦まで

天龍山石窟の盗掘によって、仏像が各地に流出してから、天龍山石窟に見るべき彫像は殆ど無くなる。一方、中国側がこの惨憺たる状況に漸く目を向け始め、一九三一年、太原県天龍山古跡古物保存規則が制定された。その四年後、王作賓が「天龍山石窟佛

像調査報告」(『古物保管委員会工作汇报』北平大学出版社、一九三五年)を発表する。天龍山石窟被害状況の把握を目的とした、中国側最初の本格的な調査であった。

この頃から、海外へ流出した「天龍山石窟将来品」の考察が始まる。その最も早いものは、春山武松の口絵解説「天龍山石窟の佛頭」(『東洋美術』一号、一九二九年)で、第十八窟西壁の如来頭部について紹介している。また、昭和九年(一九三四)に矢代幸雄が「天龍山浮彫飛天像其他」(『美術研究』二六号)を発表、ニューヨークのウィンズロフ氏所蔵の天龍山石窟第二・第三窟将来の飛天浮彫像を中心に、六朝時代の飛天について論述している。

やがて第二次世界大戦、太平洋戦争に突入し、直接現地に赴くことが困難になったこと、また破壊によつて天龍山石窟の保存状況が頗る悪化したこと等が要因となつて、天龍山石窟研究はやや停滞する。だが、そのような厳しい状況の最中、水野清一・日比野丈夫が天龍山石窟の調査をおこない、戦後出版された『山西古蹟志』(京都大学人文科学研究所報告、一九五六年)にその報告を発表した。

天龍山石窟各窟の造営年代について、従来それぞれ見解の違いはあるものの、「石窟造営の開始を北齊にするという点については、諸説一致していた。しかし、水野清一・日比野丈夫は、天龍山石窟中、最も古い様式をもつたものは第二・第三窟とし「その佛像、石窟の様式から推定すれば、東魏、すくなくとも北齊の初期にさかのぼるものである」と、年代をより引き上げて考えた。第二・第三窟の造営を東魏とする新しい見解は、その後の論文や解説に

なお、第十八窟の保存状態について、東壁に五尊、北壁に五尊、西壁には二尊（但し、西壁については「其左にも今一尊菩薩があつたらうが、前に述べた南壁崩壊と共に、顛落したものであらう」とする）とし、いくつかの尊像の首が既に失われていることを報告している。

また第二十一窟についても、尊像の首の欠失を認めているが、残存する西壁の南側の菩薩像については、「體軀は嚴身具も天衣、腰裙も解けて、純全なる裸體となつて居られる。其上石の粗面に青黴が生へて、一層の神秘的である、軟かな曲線美は遺憾なく發揮されて、而も神々しい」と、高く評価した。

だが、田中俊逸が「非常に危険な窟」と記したように、第二十一窟内の岩壁は今にも崩れ落ちるといった状態であつたため、近年その入り口をコンクリートで塞いでしまった。現在、田中俊逸の調査時では健在であつた北壁如来坐像は米国ハーバード大学サックラー美術館へ、その左脇侍の菩薩頭部が、東京の根津美術館に所蔵されている。

田中俊逸の調査は、天龍山石窟の全体を網羅し、新たに窟番号をつけ直しただけではなく（以後この番号が採用される）、撮影に成功したことも大きな功績であつた。その成果ともいえる写真集が金尾文淵堂から出版された『天龍山石窟』（一九二二年）である。八十枚にわたる図版は、現在では流出して見る影のない窟内の彫刻を見事に映し出しており、天龍山石窟の復元的な考察をする上では必要不可欠となっている。

この『天龍山石窟』は、序文に関野貞、常盤大定、望月信亨、

跋文に小野玄妙が述べているのみで、解説文等は一切みられない。やや不自然な印象を受けるが、出版に至るまでの背景に複雑な経緯があつたことを、田中萬宗（俊逸）の「天龍山石窟探險思ひ出の記（下）」（『日本美術協會報告』第二四輯、一九三二年）から読み取れる。^{（注9）}

田中俊逸の調査と同年の十月、スウェーデンのOswald Sirenが第一回目の天龍山石窟の調査に訪れている。一九二五年に出版されたCHINESE SCULPTURE (London) では、前掲『天龍山石窟』にない箇所を含めた五十枚以上の石窟図版を掲載した。しかし、第四窟と第六窟の像を取り違えて記したり（前掲『天龍山石窟』でも間違えて記している）、第十二窟の北壁像を第七窟とするなど、誤りも少なくない。一九二八年、Siren は第二回目の調査に訪れている。

『天龍山石窟』写真集と、CHINESE SCULPTURE の出版で、天龍山石窟の名は世界中に知れ渡り、美しい彫刻を獲得しようとする過激な盗掘が始まつた。^{（注10）} そのような中、大正十三年（一九二四）六月と大正十五年（一九二六）十月、山中定次郎が天龍山石窟を訪れる。

山中定次郎は、骨董商山中商会の名を全国に広めた敏腕の商人である。北京で骨董を買い集め、欧米の支店で売りさばく方法で、世界中に中国美術ブームを興した人物として知られている。天龍山石窟の仏像に高い価値を見いだした山中定次郎は、剥奪された仏像を手に入れ、次々と日本へ輸入した。その売り立て目録なるものが、昭和三年（一九二八）に出版された『天龍山石佛集』（山

戦前に出版された天龍山石窟関係論文・写真集・図版解説等

論文題目・書名等	著者	掲載誌・出版社等	発表年・月	備考
「西遊雑信 上」	関野 貞	『建築雑誌』32-384	1918年	『支那の建築と芸術』(岩波書店、1938年)に再収
「天龍山石窟を見る」	木村荘八	『中央美術』7-2	1921年2月	
「天龍山石窟」	関野 貞	『國華』375	1921年8月	『佛教学雑誌』3の4(1922年)、および『支那の建築と芸術』(岩波書店、1938年)に再収
『支那佛蹟踏査 古賢の跡へ』	常盤大定	金尾文淵堂	1921年8月	『支那佛教史蹟踏査記』(龍吟社、1938年)に再収
「天龍山石窟調査報告」	田中俊逸	『佛教学雑誌』3-4	1922年3月	
「天龍山造像攷」	小野玄妙	『佛教学雑誌』3-5	1922年6月	『大乘佛教芸術史の研究』(大雄閣1927年)に再収
『天龍山石窟』	撮影 外村太治郎・平田鏡	金尾文淵堂	1922年10月	関野貞・常盤大定・望月信亨序、小野玄妙跋
「天龍山石窟諸像の製作年代」	小野玄妙	『無礙光』19-4	1923年	
『天龍山石窟写真集』		北京 平田写真館	1923年頃か	撮影者・撮影時間は不明
『天龍山石窟図集』		北京 磐田H	1923年頃か	撮影者・撮影時間は不明
CHINESE SCULPTURE, vol. I ~IV	Osvald Sirén	LONDON	1925年	
『支那佛教史蹟』第3集	常盤大定・関野 貞	佛教史蹟研究会編	1926年12月	
『天龍山石仏集』	山中定次郎	山中商会	1928年	
口絵解説「天龍山石窟の佛頭」	春山武松	『東洋美術』1	1929年	
「支那建築に於ける墓股の発達 主として天龍山石窟の墓股に就いて」	奥村伊久良	『佛教美術』14	1929年9月	
「天龍山の石窟について」	関野 貞	『国際寫真情報』10-5	1931年頃	
「天龍山石佛」	田中萬宗(俊逸)	『日本美術協会報告』21	1931年	
「天龍山石窟探險思ひ出の記」上	田中萬宗(俊逸)	『日本美術協会報告』23	1932年1月	
「天龍山石窟探險思ひ出の記」下	田中萬宗(俊逸)	『日本美術協会報告』24	1932年4月	
「天龍山浮彫飛天像其他」	矢代幸雄	『美術研究』26	1934年	
「天龍山石窟佛像調査報告」	王作賓	『古物保護委員会工作汇报』北平大学出版社	1935年	
「山西省天龍山佛蹟石窟踏査記」		『山中定次郎翁傳』故 山中定次郎翁伝編纂会編	1939年3月	
『支那文化史蹟』第8巻	常盤大定・関野 貞	法蔵館	1940年	『支那佛教史蹟』の復刻版(若干の違いあり)

踏襲されていく。

一方、第一窟の門外東にある碑について、田中俊逸が「風化消滅して一字も読み得ない」としたのに対して「末尾に『開皇』云々の文字がみえる。佛像は一般の隋佛に一致し、第八洞方柱の諸尊にもちかい。やはり隋代の造建といふべきであらう」とした。現在、碑の文字は摩滅して全く見る事ができず「開皇」の文字があったかどうか、確かめることはできない。北斉か隋か、第一窟の開鑿年代についてはさらに検討を要すといえよう。

以上が戦前における天龍山石窟研究の大略である。その基盤は日本人研究者によつて作られたといつても過言ではあるまい。内容は実地調査報告と、それに伴う各窟の造営年代に関する若干の言及が中心であり、概説的な考察が殆どであったが、破壊前の状況を収めた写真集の出版は、実に評価すべきことといえよう。

五 終戦以後 — 天龍山石窟研究の展開

昭和二十五年（一九五〇）、水野清一が「唐代の仏像彫刻」（『仏教芸術』九号）を発表、天龍山石窟の唐代彫刻にも言及し、造営年代を検討した。

戦前は、天龍山石窟の唐代窟の諸像について一応の評価はされていたものの、それについての具体的な言及はけつして多いたとはいえず、寧ろ早期造営にあたる、東魏、北斉、隋窟に対する発言が中心であった。戦後は天龍山石窟の半分以上を占める唐代窟に着目し、積極的な年代の考察がおこなわれ、その対象も世界各地に所蔵されている天龍山石窟将来諸像に向けられるようになる。

一九六五年、シカゴ大学の Harry Vanderstappen と Marilyn Rhié が “The Sculpture of T'ien Lung Shan : Reconstruction and Dating” (ARTBUS ASIAE vol. XXVII-3) を発表した。^(注23) 剥奪された各像を集め、その所在を推定し、石窟の復元を試みた本格的な論考で、天龍山石窟研究を大きく前進させた。

一九七四—七五年には、Marilyn Rhié が “A Tang Period Stele Inscription and Cave XXI at T'ien-Lung Shan” を発表、^(前掲社) 前掲の「大唐勿部將軍功德記」を訳出し、碑文は天龍山石窟の第二十一窟開鑿に関わると述べた。また、中央アジア、アフガニスタン、北インドからの様式伝播を指摘し、唐代窟の造営年代にも言及した。

一方、中国側では史岩・傅天仇『天龍山石窟芸術』（太原図片出版社、一九六三年）が出版され、美術史的な考察が本格的に始まる。また、文化財の保存に力を入れたのもこの頃のように、天龍山石窟を取り巻く環境を次々と整備し、保護地区として認定した。

一九八〇年代に入ると、田村節子^(注24) や林良一・鈴木潔^(注25) が天龍山石窟を訪れる。戦後わが国の研究者がおこなった最初の本格的な実地調査であった。その後鈴木潔は「天龍山唐朝窟編年試論」（町田甲一先生古希記念『論叢 仏教美術史』吉川弘文館、一九八六年）を発表、天龍山石窟の唐代窟諸像の注目はますます高まり、様式分類から造営年代に至るまで、詳細な研究がおこなわれた。やがて研究方法は様式論を中心に、石窟の復元的な考察も踏まえながら、徐々に細分化されていく。

一九九〇年代に入ると、中国側の研究者の積極的な発言が目立

時代	西 曆	年 号	関 連 事 項
中 華 民 国	1918	民国 7	(大正 7 年) 6 月、関野貞調査。
	1920	民国 9	(大正 9 年) 10 月、木村莊八来訪。10 月、常盤大定調査。
	1922	民国 11	(大正 11 年) 3 月、田中俊逸、外村太治郎、平田饒調査。10 月、Osvald Sirén 第 1 回調査。関野貞第 2 回調査。
	1923	民国 12	この頃 (~1924)、大規模な盗掘か。
	1924	民国 13	(大正 13 年) 6 月、山中定次郎調査。夏、常盤大定第 2 回調査。
	1925	民国 14	(大正 14 年) 夏、常盤大定第 3 回調査。10 月、奥村伊久良調査。
	1926	民国 15	(大正 15 年) 10 月、山中定次郎第 2 回調査。
	1928	民国 17	Osvald Sirén 第 2 回調査。
	1930	民国 19	馮玉祥將軍、天龍山に隠居し、白龍祠西岩に詩を刻む(『柳子峪志』)。
	1931	民国 20	太原県に保存古跡古物委員会が設立し、「太原県天龍山古跡古物保存規則」を制定。
	1933	民国 22	王作賓調査(北平公安局協同本会北平分会)。
	1937	民国 26	(昭和 12 年 7 月、廬溝橋事件)
	1939	民国 27	(昭和 14 年 9 月、第 2 次世界大戦開始)
	1940	民国 28	(昭和 15 年) 水野清一・日比野丈夫調査
	1941	民国 29	(昭和 16 年 12 月、太平洋戦争開始)
	1945	民国 33	(昭和 20 年 8 月、終戦)
	1949	民国 37	太原市解放。
中 華 人 民 共 和 国	1955		華東芸術専科学校美術史経研究室調査。
	1957		岳維藩市長、天龍山を調査。この頃、聖壽寺廃墟と化していたため、太原市が修復に着工する。
	1958		太原市文化局、聖壽寺を重修、晋祠から天龍山に至る山道を整備。
	1961		国家重点文物保護区となる。
	1962		閻文儒調査。
	1964		中央美術学院劉開渠と傅天仇、浙江美術学院史岩、調査。
	1966		(~1977、文化大革命)
	1979		天龍山重修。
	1980		(~1983) 聖壽寺堂宇を重修、登山道の整備。
	1982		第 9 窟菩薩像頭部の復元。6 月、田村節子調査。7 月、筑波大学訪中団(林良一・鈴木潔)調査。
	1984		天龍山文管所の設立が承認。太原市、天龍山文物の修理予算を増額。
	1985		7 月、天龍山文物保護管理所成立。
	1986		天龍山、省級重点風景名勝区に指定。
	1987		秋、漫山閣(第 9 窟)を復元。
1988		白龍廟上方に高観避暑宮碑亭を建てる。夏、李裕群調査。	
1996		太原人民政府、晋祠から天龍山までの道を整備。	
2001		李裕群、第 2 回調査	

参考：李計生『山西旅游風景名勝叢書 天龍山』(山西經濟出版社、1999年1月)、李裕群・李鋼『天龍山石窟』(科学出版社、2003年3月)等

天龍山石窟関係略年表－開鑿期から現代まで

※ゴチックは主な学術的調査

時代	西暦	年号	関連事項
北魏	532	永熙元	高観、爾朱氏を滅ぼし、晋陽に大丞相府を置く。
東魏	534	永熙3	高観、孝静帝を立て、都を洛陽から鄴に遷し、東魏を建てる。 執政期間中、天龍山に避暑宮を建てる（「大漢英武皇帝新建天龍寺千仏楼碑」）。
	547	武帝5	高観、晋陽で没す。
	550	武帝8	高観の次子、高洋（文宣帝）、孝静帝を廃し、北斉を建てる。
北斉	551	天保2	文宣帝、天龍山に避暑宮を建てる（『嘉靖太原縣志』巻1）。「仙巖寺」にあたる場所か。
	560	皇建元	天龍寺あり。定国寺の僧、天龍山石窟を造る（『太原志・太原府』「寺観条」）。
隋	584	開皇4	天龍山石窟第8窟開鑿（碑）。
唐	624	武徳7	仙巖寺、額を賜る（『太原志・太原府』「寺観条」）。
	660	顕慶5	高宗・武后、龍山童子寺に行幸（『法苑珠林』巻14）。
	707	神龍3	「大唐勿部將軍功德碑」なる（碑文、『金石萃編』巻68ほか）。
(五代)北漢	957-73	天会年間	睿宗皇帝、天龍寺を重修（「大漢英武皇帝新建天龍寺千仏楼碑」）。第9窟造営か。
	975	広運2	劉繼元（英武皇帝）、群臣を率いて天龍寺を参拝。「大漢英武皇帝新建天龍寺千仏楼碑」なる。
金	1124	天会2	天龍寺、兵火を被り（「重修天龍寺銘」）、廃する（『嘉靖太原縣志』巻1）。
	1148	皇統8	天龍寺、重修。千仏大殿、六師堂を建てる（「重修天龍寺銘」）。
	1158	正隆3	天龍寺山門、鐘楼を修理（「重修天龍寺銘」）。
	1159	正隆4	「重修天龍寺銘」なる。
元	1342	至正2	天龍寺重修（「重修天龍聖壽寺記」）。
明	1391	洪武24	仙巖寺、天龍寺に入る（『嘉靖太原縣志』巻1）。
	1465-87	成化年間	聖壽寺廃する。 のち、晋陽延慶寺僧古潭、聖壽寺に住し、復興に努める（「重修天龍聖壽禪林碑記」）。
		1506頃	正徳初
	1542	嘉靖21	聖壽寺龍祠を重修。
	1545	嘉靖24	聖壽寺、大規模な重修をおこなう（「重修天龍聖壽寺記」）。
	1546	嘉靖25	「重修天龍聖壽寺記」なる。西巖に石洞三龕を穿つ（『太原縣志』）。
	1561	嘉靖40	「重修天龍聖壽禪林碑記」なる。
	1565	嘉靖44	「天龍聖壽碑記」なる。
	1580	万暦8	山西按察司提督学校副使賀邦泰等、天龍石洞重修のため出資（「天龍石洞記」）。
	1595	万暦23	「重修天龍山聖壽殿閣記」なる。
清	1666	康熙5	国学大師朱彝尊、天龍山石窟を踏査？
	1734	雍正12	聖壽寺回廊を修理。
	1861	咸豊11	漫山閣、大佛、菩薩像（第9窟）等修理。及び各堂宇を重修。
	1908	光緒34	E. Boerschmann、調査？
	1910	宣統元	C. Freer、調査？

ち、天龍山石窟研究も一応の到達点を迎えたようにみえる。李裕群は十日間にわたる調査の報告として「天龍山石窟調査報告」(『文物』一九九一年第一期)を、翌年には「天龍山石窟分期研究」(前掲注⁴)を発表した。先学の意見を随所に採用し、天龍山石窟の造営背景を整理したうえで、造像の細かな分類をおこない、各窟の造営年代に言及した論考である(注¹⁶)。一九九七年には顔娟英が、文献史料に基づいた天龍山石窟の造営について考察し、特に第八窟門外の碑文と「大唐勿部將軍功德記」に注目、隋代・唐代造像の検討をおこなった(注¹⁷)。最近では孫迪が『天龍山石窟 流失海外石刻造像研究』(前掲注¹⁸)を出版、Vandersaepen の業績をさらに補強した形で天龍山石窟の復元を試みた。

おわりに

天龍山石窟が発見されてすでに八十年以上が経過した。近年では中国彫刻史を語る上で、必ず取り上げられるほど重要視されるようになってきている。中国側の研究も目覚しく、ますますの発展が期待されよう。一方、文献史料の限られた天龍山石窟に、今後いかにアプローチしていくか、研究方法の模索が迫られている。散逸した天龍山石窟諸像の状況把握はもちろんのこと、「天龍山様式」と称される石窟独特の唐代諸像のさらなる検討とともに、石窟草創に関わる東魏窟、北齊窟、隋窟諸像を見直し、中国彫刻史の座標上、どのように位置付けるかが必要である。それには河北、山西省に点在する同時代石窟との比較検討が重要になってくるだろう。

最後に、厳しい自然環境に置かれた中国石窟の全てに共通する問題であるが、深刻な風化を抱える天龍山石窟の保存に対し、具体的にどのような対策をすべきか、すでに殆どの彫像が失われているとはいえ、今後の大きな課題となろう。

注

- 1 『嘉靖太原縣志』卷一(『天一閣藏明代方志選刊』八、上海古籍書店、一九八一年)。
- 2 『永樂大典』卷五二〇三に収録(『永樂大典』卷五二〇三、五二〇五、第三四冊、世界書局、台北、一九六二年)。
- 3 『太原縣志』卷三「祀典」の「聖壽寺」条にも、前掲『嘉靖太原縣志』の「天龍寺」条とほぼ同じ記載がある。このため、天龍寺＝聖壽寺とするようになったと思われる。
- 4 小野玄妙は「天龍山石窟造像攷」(『佛教学雑誌』卷三第五号、一九二二年)「今の聖壽寺が復古 天龍寺其のものであるとするのは聊か當を得ない」とし、もともと西峰の第二十一窟の崖下に天龍寺があり「現今の地に移建されることになってから改めて聖壽寺と呼ぶることゝなつたではいか」としている。
- 4 小野玄妙は前掲「天龍山石窟造像攷」において 天龍寺と仙巖寺は「殆ど同一處に接近してあるものと見なければならぬ」とし、天龍山石窟東西峰を「西峰の窟寺は即ち天龍山、東峰の窟寺は仙巖寺であると判断したい」とした。さらに発展させて、東峰の第二・第三窟を葦谷山仙巖寺にあて「東峯の第二第三窟は、北齊文宣帝天保二年(西紀五五一)の造頭、西峯第九窟の大佛並に第十窟の諸像は同孝昭帝の皇建

元年(西紀五六〇)の製作に擬定すべきもの」とした。

しかし、翌一九二三年に発表された「天龍山石窟諸像の製作年代」(『無礙光』第一九卷第四号)では、西峰の諸窟を仙巖寺、すなわち第九窟、第十窟、第十六窟にあて天保二年の造立とし、東峰諸窟を天龍寺、すなわち第二・第三窟にあて、皇建元年の造立と訂正した。

一方、李裕群は「天龍山石窟分期研究」(『考古学報』一九九二年第一期)で、皇建元年に建てられた天龍寺は西峰にあり、それは第十窟、第十六窟にあたるとした。また、仙巖寺は東峰の第一窟と関係し、天保二年に建てられた文宣帝の避暑宮にあたることを示唆している。

5 「大唐勿部將軍功德記」の拓本は、現在北京図書館に所蔵されているという。近年聖壽寺東側の溝から碑の断片が発見された。本「功德記」は『金石萃編』巻六八を初め、九種類以上の清代金石著録類に収められている。

6 Marilyn Riie, "A Tang Period Stele Inscription and Cave XXI at T'ien Lung Shan", *ARCHIVES OF ASIAN ART* vol. XXVIII, (1974-75)
後に小野勝年が「右金吾衛將軍勿部珣の功德記について—天龍山の百済の一帰化人—」(『史林』第七一巻第五号、一九八八年)で、「功德記」の和訳を試みている。

7 聖壽寺に碑像あり。碑文は胡聘之撰『山右石刻叢編』巻九に収録されている。また、関野貞・常盤大定『支那佛教史蹟』第三集(本文参照)の「評解」にも掲載している。

8 一九〇八年に Dr. E. Boerschmann が、一九一〇年には Mr. C. Freer が訪れていること、Harry Vanderstappen と Marilyn Riie が訪れているが(本文参照) "The Sculpture of T'ien Lung Shan: Reconstruction and

Dating)、報告書等の発表については不明である。

9 田中俊逸は「私の苦辛惨憺した寫眞は歸朝の上、無断で出版せられ、此解説書すら附さなかつたのです」とし、その後これらの写真が関東大震災で烏有に帰したことを述べている。そして、天龍山石窟の石仏が輸入され、石窟の破壊につながったことに際し、「一佛を餘さず悉くを空洞とした事は天龍山は私に取つては己身的にも、學術的にも涙で初まり涙で終るのであります」と嘆いておられる。

10 常盤大定は「大破壊の行はれたるは、大正十三年の事 が如し」(本文参照『支那佛教史蹟』第三集)とする。

11 『山中定次郎翁伝』山中商会、一九三九年。

12 孫迪は『天龍山石窟 流失海外石刻造像研究』(外文出版社、二〇〇四年)で、一九二七年前後に海外へ流れた天龍山石窟の名品は山中商会からのものである、としている。

13 中文訳に李崇峰・李裕群「天龍山石窟彫刻的復原与年代」(『敦煌研究』一九九五年第一期)がある。

14 田村節子「天龍山石窟第十六窟・第十七窟について」『仏教芸術』一四五号、一九八二年。

15 林良一・鈴木潔「天龍山石窟の現状」(『仏教芸術』一四一号、一九八二年)。

16 二〇〇三年に出版された李裕群・李綱の『天龍山石窟』(科学出版社)の報告も掲載している。調査報告の総大成ともいうべき著作で、周辺の石窟群

17 顔娟英「天龍山石窟の再省思」(『中国考古学與歴史学之整合研究』中央研究院歴史語言研究所會議論文集之四、台北、一九九七年)。